

---

# 神の選択と抗う絆

鷺崎 弘

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神の選択と抗う絆

### 【Zコード】

Z7349Z

### 【作者名】

鷹崎 弘

### 【あらすじ】

突如隼の前に現れた死神テトラは隼に願つた。  
世界を救つてほしい、と。

隼は強引にテトラに異世界に転移させられるが、隼はどうすれば世界を救えるのかを教えてもらつていない。

異世界という変わり果てた日常の中で隼は、出会いや別れ、取り留めないことさえも通して過去のトラウマから抜け出し、変わろうとする。



## 〇〇 要領の悪い神（前書き）

序章  
壊された日常

## 〇〇 要領の悪い神

その日、全てが変わった。

「うお！……」

学校から帰宅中の、荒神隼あらがみはやとは今日もいつも登下校に使っている道を自転車に乗つて一人走つていた。

高校を入学し、隼がこの道を使つようになつてから既に三ヶ月が経ち、この道ももう慣れた道と言つてもよい頃となつた。

しかし、慣れとは恐ろしいものだつた。

隼はいつも通り：いや、この道に慣れたせいもあるのか、注意力が散漫の状態で曲がり角を曲がつた。

そして突如、隼の目の前には一台の車が現れた。  
車もブレーキを掛けているのだろうが、確実に当たるのが分かつた。

隼は反射的に強く目を閉じ、身体を強張らせた。

「……生きてる?」

それが、恐る恐る目を開けた隼の第一声であった。隼はいつの間にか寝転つている状態になっていた。

(車にひかれたけど、当たり所がよかつたとか?)

そう考えながら隼は普段通りの力の入れ方で、まず上半身を持ち上げてみた。

「……痛く、ない?」

なぜか隼は全く痛みを感じることなく上半身を持ち上げることができた。

「たしかに、俺は車にひかれた……よな?」

もはや、車にひかれることすら半信半疑の状態であった。特に、目を閉じていたため、車と衝突した瞬間を見えていないことと、痛みが全く無いことが隼の頭を余計に混乱させていく。

「んーー…………ん? あれ? ここどこ? ?」

隼は今まで気付かなかつたのだが、ふと、辺りを眺めてみると、そこは明らかに先程までいた道路ではなかつた。

一番異なつていたことは、自分でも今までどうして気付かなかつたのかと思うのだが、隼は今、自身の身体ですらも見えない程の暗闇の中にいたのだった。

「……やつと目が覚めたな。待ちくたびれたぞ。あと5分、目が覚めるのが遅かつたら叩き起しすといだつたぞ」

不意に、頭上から声が聞こえた。

その声の主は口調こそ男のよつなところもあるが、声色は若い女

性のものだった。

「……誰？」

当たり前の疑問が隼の口からこぼれた。そもそも隼はどひじひこにいるのか、自分でも分かつてない。

「そうだな……まあ、私のことはテトラとでも呼ぶとい。確認しておぐが、お前の名は荒神隼で間違いないな？」

「え、ええ、そうですけど……どうして俺の名前を？」

そもそもあなたはいつたい……？」

彼女は素早く隼の意を汲み取つて、こゝう話を続けた。

「おつと、呼び方なんてどうでもいいな。私が何者なのか、だな」

「……そうです。あなたは何者なんですか？」

「私は……そうだな……お前達、人間に死神と呼ばれている存在、と言つところかな」

「……え？」

隼は、何を馬鹿なことを言つて言つてているんだ、と思ひもしたが、それ以上に、言い方こそ雑だが、テトラは本氣で言つているように感じられた。

「本氣で言つています?」

「ああ、本氣だとも」

テトラは一瞬たりとも間を空けることなく断言した。

「……」

「……」

「……証拠を見せてもらえませんか?」

「まあ、よいが……その前に堅つ苦しい話し方やめにしないか……昔のことを忘れるとは言わないが、もう少し器用にできないかのか?」

「 つ……」

テトラのその言葉によつて隼の頭の中に昔の記憶が蘇る。  
そして、それが彼を覆いつぶやうとする。

恐怖によつて。

「すうー…はあー…」

隼は大きく深呼吸する」とこなつて、ビリビリか落ち着きを保てた。

「どうしてそのことを知つてゐるのかは、分かりませんが、まず、  
証拠を見せてください」

「分かつた。分かつた。

……ふむ。さて、なにをすればお主に認めてもらえるものか…？」

「……」

しばしの沈黙。

そして、テトラが話しだす。

「…よし…」

ならばここで人の理を越えた力を見せれば、認めてもらえるか？」

「……分かりました。本当にそんなことができるのならば、認めましょう」

と呆れたように言つたものの、テトラのその自信に溢れた物言い  
が隼を不安にさせる。

「では、いぐど…と、その前に隼、頭上をよく見ておけよ」

「わ、分かりました」

隼は、じくり、と唾を飲み込む。

そして

頭上から一筋の雷が隼に向かつて、直撃してきた。

「 つ…！」

当たり前だが、雷は光の速さを持つため、隼がその雷に気付いたのは直撃した後だった。

だが、それが自らに向かつて落ちてきたことは認識できた。また隼の目は暗闇の中にはいるせいで分かりにくいが、その眩しさによって焦点が微妙に合つていらない感覚があった。

「どうだい？ 信じてもらえたかな？」

呆然としている隼にテトラは尋ねた。

「……え？ ああ……いや、少し待つてくださいこいつ！」

俺は雷に当たったのでは！？

隼は死んでいない。それどころか、痛みすら感じていなかった。だから、このような質問が出てきたのだ。

「ん？ ああ、今のは雷ではないぞ。今のはな」

「才能」と書かれた名の光だ

「……は？」

目が覚めてから、驚くばかりの隼だが、驚くといつことが無くなる気配は無かつた。

それ以上にもはや聞いたことが間違いだったのでは、と思つようになつている。

「……分かりました。信じる」とこしまじょう

「助かる」

隼は何とも言い難い思いがあつたのだが、一応はテトラのこと認めた。

いや、認めざるをえなかつた

「それで？ その死に、が……！」

隼はテトラを死神だと信じた後になつて、よつやく思つ出す。事故にあつたことを。

「そう、か…俺は死んだってことですか……」

それなら完全に納得…とまではいかないが、わずかに納得できるところがある。

「魂の回収といつものですか……」

「いや、違うが」

「えつ…！？」

「……」

テトラは当然の様に隼の発言を否定した。

隼は恥ずかしいことを眞面目に言つたからだらうか、顔に熱を感じ、赤くなっているのが分かった。

また、テトラが少し面白がっている気がした。

「な、なら、何が目的なんですか？」

その質問に対してもテトラは一拍おいて、真剣な声で話しだす。

「…私がお前を呼んだ訳は…隼…お前に世界を救つてほしい…」

「……」

隼は、もはや何に対しても、びつ驚べきなのか、自分でも分かつていない。

つい先程、意味の分からない力を見せつけられ、ありえない存在を認めさせられ、とうとう、隼自身に対しても理解できないことを求めてきた。

隼はもう何も言えなかつた。

「理解しがたいのは分かる。だが、もはや時は一刻を争うのだ」

私達にもお前にも。

「……え？ 僕にも？」

「そうだ。まず、私が言つている『世界』とはお前が思つてこられるよ

うなものではない。」

隼は首を傾げた。

しかしテトラは仕方ない、と言つ風に話を続ける。

「お前に分かりやすく言つならば、救つてほしいのは全ての過去、現在、未来。そして全ての平行世界だ」

テトラは真面目な口調で話している。

隼も意味は分かった。

だが、ただそれだけであった。

「まず、お前にはある地に赴いてもらつ必要がある」

「……その前に聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「あの、俺は死んだはずではないのですか？」

隼はテトラの言つ『世界』は理解不能とし、一番気になっていたことを聞いた。

「ん？」

ああ、そうだな……そのことについても話さないとならぬいか  
ふむ、どこから話すべきか…

隼の額から汗が流れる。緊張しているのだろう。

そして、テトラは再び口を開いた。

「よし、まずはどこに行つてもらうからかな。隼、お前には

異世界に転移してもらひつ。

「……」

「……」

「……」

「……」

「さて、その異世界とはな

「ちょっと待つてください……！」

「まあ、黙つておれ。まずは私の話を全て聞け」

そのテトラの声は今までと異なり、相手に有無を言わさないものだった。

「……分かりました」

「よい。まず、その世界の『はじまり』の世界の言語で『はじまりの世界』と言ひとこりか。そこはな、この世界で言ひ神話の世界なのだ。

いや、そもそもいくつかの神話はもともと、あちらの世界での実際の出来事だ。それが空間の歪みによつてこの世界に投影され、伝わつていつた。

そんな、お前達の世界ではありえない闘いの世界こそが『始まりの世界』というわけだ」

(…………これはどう反応すればいいのだろうか？)

隼は黙つておくように言われたため、一人心の中でそつ思つていた。

「次にお前がそこに行かなければならぬ訳なのだが……いや、その前にあちらの世界の現状を話そつか」

(何か深刻そうだな…)

テトラの声は最初に会話した時のものとは明らかに雰囲気が異なり、今は深刻そうに語つてゐる。

「今、あちらの人間は神々と戦争をしている……いや、違うな……そつ、神の干渉から逃れた、と言えば分かるか？」

(……分かりません…)

むしろ分かる人なんているのだろうか、とも思つてゐた。

「神はいる。その事を頭に入れて聞くがよい。

それで神つて存在は世界の管理をしている。基本的に人間からの干渉は出来ないのだが、あちらの世界の人間は神を人間界に引きずりおろして……殺した

(……それはどのくらい凄いことなんだ?)

「神はな、人間界だと本来の力の百分の一の力も出せない。人間も水中で走ることは難しいだろ?」

それと同じだ。神とて人間界では鬭いにくい。おまけに人間は神を強制召喚させる際に、さらに百分の一の力しか出せなくする結界を張った。要は一万分の一の力も神は出せない。そして、殺された」テトラ自身も死「神」のはずなのだが、同じ「神」が死んだことを全く気にしていないかの様に話した。

(……人間もやるなあ……)

それに対して隼は感心していたのだった。

「下級神が殺されるところまでは別に上位の神々は気にしていなかつたのだが、その後、人間はとうとう中級神まで殺してしまった。そして上位の神々……上級神以上が人間を危険視し始めた。

だがな、神が自ら人間界に降りることは神々のシステム上問題があつた。だから神は『人間』を使うことにした

テトラは大事なこともスラリと、会話の流れで言った。

「は?

それはどういうことですかっ!?

今まで我慢していたが、とうとう隼は声を出してしまった。

しかし、テトラも特に気にする様子もなく話を続けた。

「他の世界の人間をあちらの世界に潜り込ませ、滅ぼさせるために、

だ。ただ、リスクも大きかつた。世界を渡ることの成功率は一パー セント未満。

そして失敗したら魂は……消える……

テトラは重そうに語るもの、隼には魂という物がよく分からな いため、テトラに尋ねた。

「魂が消えると、どうなるのですか？」

「……一つの魂が消えることで数万の人間が…消える…」

「??

待つてください。どうして魂一つで数万人もの人間が消えるので すか！？」

「……世界つてものはな、神ですら幾つあるのか分からんのだよ。 例えば神の上の神、その上の神、と可能性の話をしたらきりがな いことがある。

同様にそれが積み重なり、私達ですら知らない世界がある可能性 もある。そして魂は一人一つではない。世界を越えて繋がっている。 だからなんだ…」

「なら、どうして死神が俺に接觸してきたんですか？」

一度話しだしたら止まらない。だが、テトラも怒ることはなかっ た。

黙っていた意味はあつたのだろうか、とさえ思えた。

そして、今の隼の発言。気がつくと隼は何気なくテトラのことを 死神と言っていた。

隼はいつの間にか疑いが完全に消え、テトラを死神と認識したよ うだった。

「うむ。それでなその魂の消滅のせいで世界のシステムが壊れ、世

界が滅んだ。それも既に数百は越えている

「えっと、その神々のシステムとか世界のシステムつて

」

何なんですか？

そう聞こうとしたが、できなかつた。

テトラの声が隼の声を遮る。

なぜなら、

「なつ　　！」

くそつ！もう時間が無い。今すぐあちらに送るぞーー！」

急にテトラが焦りはじめたからだ。

「え？　えつ！？　それって魂が消え　　」

「大丈夫だ。そのための『才能』をお前に与えておる。あちらの言語も頭の中に突っ込んである。だから頼むぞ。

世界を救ってくれ

「ちょっと待　　」

そして隼は意識を失つた。

……ただ、彼には意識を失う前に言いたいことが一つあつた。

だから、結局何をすればいいのですか？…？

そう…テトラは隼に「世界を救ってくれ」とは言ったものの、何

をどうすればよいか、ところにについては一切教えていなかつた  
のだ。

01 異世界（前書き）

第一章

異世界突入編

「…………んつ……ん」

荒神隼は何か生暖かい物にべろり、と頬を舐められた様な感覚と共に目を覚ました。

「ここは……？」

まだ意識がはつきりとしていない中、隼は周りの状況を確認しようと辺りを見渡す。

そこは見渡す限り木しかない。密林地域とでも言つのだらうか。そんな場所だった。

そして隼の隣には彼が今まで見たこともない生物がいた。

(…「イツは犬か？ 犬なのか？

見たところ、ここは山か森の中なんだなつねど、この犬っぽいのは何だ？？)

そう考へてみると、隼はようやく思ひ出した。

テトラに異世界に送られたことを。

「ここが異世界、か…」

隼は感慨に浸る、というわけではない。むしろ本当に異世界なんか、どうか疑つていたくらいである。

隣にいる生物の頭を撫でながら、隼は呟く。

「はあ……結局俺は何をすればいいんだろうな……そもそも何で俺なんだ？ 才能の光つてなんなんだよ？

……いや、その前に必要なことは何も言われてないよな……」

そして、隼がぼんやりとしていると、先程の生物が隼の足に頬をすりつけてくる。

その生物の身体の大きさはまるでチワワの様に小さく、隼は何も知らないが、たぶん何かの子供だらうなと思った。

「この大きさで大人という可能性もあるのだが。

その全身の太さはチワワより断然太く、体毛は真っ白な毛できれいに整つていて、触り心地がたまらなく良かつた。

だが、犬にしては顔つきが少しおかしい。

確かにかわいらしいのだが、犬とトカゲを合わせた様な顔つきをしている。

「きゅーー？」

その生物は、まだ鳴きながら隼の足に頬をすりつけ続けている。

（俺の顔を舐めたのも、コイツだろうな）

隼はのんびりと考えているが、よくよくその生物を見ると驚くべきモノがあつた。

「これは羽根だよなあ？」この生物の背中にある鳥の羽根のような物を優しくつまんでみる。

その羽根の大きさだけを見るとならばさほど大きくはないが、身体の大きさと比較してみると中々のものである。

犬とトカゲを混ぜたような顔をし、四足歩行で白いふさふさの毛を持つている。そして大きな羽根が生えている生物。まとめるところになると、

犬でないことは確定していた。

（……なんかドラ「ンみたいだな…）

と、冗談半分で思つたが、テトラがこの世界は隼が元いた世界の神話ので出てくるような世界だと言つていたことを思い出した。

それなら、これもあつえるのか、とかで考えるのを止めな。

「よこしょりと」「

隼はその生物のことを見渡して立ち上がったものの、隼には「この  
がどんな所なのか検討もつかない。

「まあ、適当に動き回つてみるか…」

まずは人を探さうと隼は思つてゐる。  
そして街に行く。

情報が必要だと思つてながら、それ以上に野営などしたことない隼にとつては、山の中で夜に一人でいることが、とても怖く、怯える姿が隼自身でも田に浮かぶというのが大きな理由だ。

度胸がないな、と自虐すらしていた。

「ぴやあーー！」

そう考へながら歩き始めると、この生物も隼の横に並ぶようつてついてくる。

「しつ、しつ。こっち来んな！」

隼は手で追い払つよくなジエスチャーを見せながら言つが、。

「ぴゅう？」

「あー、絶対にわかつてないな。まあ、当たり前か。

……なら、まずはコイツを引き離しておくか

こんな小さな生物でも、どんな習性のある生物か分からぬのだから、いきなり襲い掛かつてくる可能性もある。

だから、隼は早くこの生物を引き離したいと思つてゐる。

そして、走つて逃げよつかと隼が思つていた時だつた。

近くの草木が、ガサガサと音をたてた。

隼はその方向に素早く振り向いた。

「ぶ」おおおお

そしてそこからは奇妙な生物が出てきた。

一瞬、人間かと思ったがまったく違った。

その生物は一足歩行という点は人間と同じなのだが、他が大きく異なつていおり、皮膚は濃い緑色をし、瞳の中は全て真つ黒、黒目しかない様に見え、耳は人間のそれよりもはるかに尖っていた。

身長は一メートル程であろうが、筋肉の付き方が激しい。

相撲取りよりも太い体つきなのにも関わらず、それが全て筋肉でできているように思わせる程の綿まり具合であつた。

そして、その手の中には太い木でできた丸太の様なものが鷲掴みにされていた。

「ぶ」おおおお

そいつはそう叫びながら隼を再度睨み付け、襲い掛かってきた。

「クソッ！俺が何をしたんだよ！」

涙目になりながら全力疾走する男がそこにいた。

「はあ、はあ、はあ」

地面が柔らかく走りにくかつたため、隼は十分以上走り続けて、ようやく先程の生物を撇けたようだつた。

「ぴやああ！」

「なつ！」

隼はあまりに本氣で走っていたせいで気付かなかつたのだが、その声の主である小さなドラゴンのような生物は隼の背中にくっついていた。

そしてようやく息が整つてきた頃、近くから音が聞こえてきた。その音はあるで滝が流れ落ちてゐるような音であった。

「……水…水」

今しがたの逃走で、すでに隼の喉は渴ききつてゐる。水に飢えてた隼は一目散に音がどこから聞こえるのかを聞き分け、足を進め始めた。

小さな生物も付いてこようとするのだが、隼には振りほどく余力はどこにも存在しない。

予想通り、歩いてすぐのところで滝を見つけた。

その滝の下にある湖らしき所には、底が透けて見えるほどの綺麗な水があった。

隼は早速、勢い良く、大量に水を飲む。

水を飲み終えると、なぜか隼の身体は火照つてたまらなくなつた。それは走ったから暑い、というわけではない。その熱はすでに引いている。

しかし身体の内側からは止まることなく熱が生まれ続けているようを感じさせる。

(まさか、この水、飲んだらやばいのか！？)

そう思つてゐると、とたんに身体の熱は消えた。

本当はこのことについてはもつと考へるべきだつたのかもしれないが、そんな考へは頭の中から飛んでいく。

顔を上げた隼にはそれ以上の驚きがあつたからである。

目の前には水浴びをしている女性がいた。

無論、水浴びをしているのだから裸である。

その女性は隼に背を向けていたため、どのよつな顔をしているかは分からぬのだが、肌の色はとても白く、髪は灰色のものを腰まで真っ直ぐに伸ばしていた。

身長は一六センチメートル程で、締まるべやといひは締まつている風な女性である。

「……つて何してんだ、俺…これ、覗きだろ…」

隼は一人そう呟いた。

しかし、思わぬ存在がその独り言に反応してくる。

「ぴやああー！」

もちろん、先程のドラゴンの様な生物の声である。

「えつ！！！」

「あつ！」

隼も水浴びをしている女性もその鳴き声に反応してその生物の方に振り返つた。

だが、すぐに隼はもう一度その女性の方に振り返る。

その女性はとても美しかつた。

おそらく、隼との年齢の差はあまりないだろ。

そのため、顔も少しあどけなさが残っている。だから、かわいいと言つ表現でも合つているような氣はするが、やはり綺麗や美しいと言つ言葉が相応しく思えた。

大きな灰色の目。

そして先程言つたよつにあどけなさが多少残つているが、顔立ちは全体的に整つている。

隼は彼女に見惚れていた。

(……ヤバッ)

二人の目が合つたと同時に隼が我に帰つた。

(どうする、どうするよ？

いや、待て、落ち着け、俺。今この場面なら、逃げるべきか。いや、だめだ、だめだ。ここがどこかもわからないんだぞ。それに、さつきの危なつかしい生物もいるんだぞ。

…謝るしかない！）

以上のことを見たはわずか数秒で考えた。  
そして素早く、深く頭を下げて言つた。

「す、すみません！！

本当に覗こうなんて気はなくて」

そのまま隼はチラリとその女性の方を見た。

勿論、下心などではなく、彼女がどんな反応をしているのか気になつたからだ。

もしも、隼が思つてた以上に彼女が怒つていたのならば、さらに誠意を見せなければならぬ。また、彼女が恥ずかしがつていうような反応をしているのなら、断りを入れてから一旦この場から退いて、少し離れた所で落ち着くのを待つた方が良いかもしれない、という考えがあつたからである。

「えつ……？ 白……？」 だが、彼女の反応は予想していないものだった。

彼女は何に対してなのは分からぬが、「白」と書いて驚いた様子でいる。

何が白なんだろう、と思うが、すぐに、この生物のことか、と納得した隼に彼女は話し掛けてきた。

「み、見た？？」

彼女は僅かに顔を赤らめて、可愛らしかったのだが、隼は何かその奥に別の感情を感じてたまらない。

(二) これはどう答えるのが正解なんだ？

見てない……とは言えないし、ほんの少しだけ、って書るべきか？  
?)

しかし隼は返答の方に思考が働き、一人苦悶していた。  
そうしていると彼女はもう一度尋ねる。

「見たの、ですか……？」

それと同時に彼女は何とも言えない表情に変わつていった。  
「そつか……見たんですね……」

暗い、暗い、悲しみの表情であり、諦めの……負の表情。  
その表情を隼は、まるで見慣れたものに感じ取っていた。  
直感なのだが、もしかしたら自分と同じように境遇の人なのかも  
しない、と隼は思つ。

そして、彼女はその表情のまま小さく呟いた。

「…………私の髪を……」  
「そつか……？」

隼は思わず頭を上げてしまった。

「あつ……」

「あつ……」

一人の視線が再びぶつかり、隼はなぜか、一度目には視線がぶつかった時は焦つただけだったのだが、二度目になると顔が赤くなってしまった。

それに対しても、彼女は目が合つた瞬間だけは驚いていたようだつたが、その後すぐな負の感情しか見受けられない表情に戻つていた。

隼はもう一度素早く頭を下げ、

「「」、「めん。あ、あの……えつと……」

気が動転して何を言つているのか分からぬ隼に彼女はもう一言、言葉を掛ける。

「いいから……気にしなくていいから早くどこかに行つて」「その声はどうとか、いや、一言一言、全てが寂しく感じられる声だつた。

(……髪のことで何かあつたのだろうな……)  
もしもそつならば、ここは何も言わずに立ち去つた方がよいのかもしない。下手なことを言えば余計に相手を傷つけることになるからだ。

隼はそつ思つている。

だけど

隼は立ち去る前に口を開いた。

どうしても彼女の顔が、心の奥底に突き刺さるから。

できるだけ優しい声で、

「ごめんね。髪も見えたんだ」

声を張り上げて、

「だけど……」

そして再び優しい声で、

「綺麗な髪だったよ」

そして、後ろに振り向く。

本来なら隼はここまで頑張る必要がないのだが、彼女のあの悲しそうな顔がどうしても頭から離れなかつた。

だから頑張つた。

そう 頑張つたのだ。

隼は昔の出来事のせいでの人と会話をするときに砕けた話し方で話そうとすると異様に緊張してしまつ。

対人恐怖症と言つわけではないが、緊張する。いや、それでもない。緊張とも少し違う。堅い口調 敬語とはすこしちがう なら緊張することなく会話ができる。

だが、砕けた口調では話せない。

だから、優しく話すことは隼にとっても大変で、苦しいことだった。

そして隼はそのまま去ろうとした。

だが、その時、

「待つて！！」

後ろから隼を呼び止める声がした。

隼は耳を疑う。

なぜ、俺を引き止めるのだ、と。

彼女は続けてこう言つた。

「もう一度……さつき言つたことをもう一度言つて

上手く聞き取れなかつたのだろうか、ただそれだけか、と納得し、

隼は深呼吸をしてからもう一度、優しく言つ。

「『めん。髪も見えたけど、綺麗な髪だったね』

「……本気で言つてる？」

「ん？ ああ、本気だよ。真っ直ぐなめらかに伸びていて、それに灰色の髪つて見たことなかつたけど、とても綺麗だと思つよ」

彼女は数秒隼を見つめて、そして、

「……………つ！！！」

なぜか顔を真っ赤にしていた。

「えつと、俺なんかおかしいこと言つたかな？」

「……………少し」

「えつ？」

「少しそこで待つて！」

彼女は隼の予想の右斜めはるか上空を通り抜ける言葉を言い残して、近くの岩場に向かつた。

服を着るためであるうが、その際に隼が見た彼女の目には涙が浮かんでいた気がしたのは、ただの気のせいだろう。

彼女が行つてしまつた後、これは失敗したのかな、何も言わなかつた方がよかつたのか、と隼は不安にななる。

「……………ふうー……………」

隼は一息つく。

不安だろうが、少し疲れた。

だが、その疲労感は少しであり、思つていた程は疲れていなかつたことと自分でも思いの外、スラスラと言葉が出てきたことは意外だつた。

(髪が綺麗だと思ったのは本心だつたからかな)

そこで隼はふと、気付く。

(あれ？ あの生物どこ行つた？

……まあ、いつか。巣にでも帰つたんだろう)

そして、待つこと十分と少々。

「ごめんなさい。お待たせしました」  
ようやく彼女が姿を現した。

彼女は黒を基調とした半袖のカッターシャツと、こちらも同様に黒を基調とした短めのスカート。さらに赤いネクタイを着けていた。そのデザインこそ、隼は珍しいと思ったものの、雰囲気は隼の世界の制服その物だった。

「えっと、そうですね。まずは自己紹介を。  
私のことはリリーって呼んでください」

俺がリリーのことを眺めていると、彼女は恥ずかしそうに話しだした。

「俺は荒神隼と言います。よろしくお願ひします、リリーさん」  
やはり隼の口調は堅いものとなっていた。

「リリーでいいですよ」

「いえ、ですが…」

「『さん』禁止！」

「わ、分かりました。リリー」

隼がリリーの勢いに押されたような形で「リリー」と呼ぶこととなつた。

「ふふっ」

突然、リリーが笑いだす。

隼はまるで頭上にクエスチョンマークがあるかのように思える、

不思議そつな顔をしてリリーを見る。

「あつ！ 『あんなセーフ！ ！』

リリーは我に返つたように謝る。

別にいいですか、どうしました？」

「えーとね、堅苦しいのはなしでも」と樂にしない?」

1 -

リリーが計算したような角度での上田遣いを使いながらお願ひする。

つ  
た。

卷之三

そして、そのまま会話が続くのだが、これからはリリーが一気に隼に質問を投げ掛けてくる。

「だけどさつやと話しかけたのはどうして？」

あと、アラガミハヤト？ なんて呼べばいい？

「えっと、隼でいいです。それと先程の話し方は、その方がリリーも落ち着くかな、と思いまして」

「ふうーん」

リリーは小悪魔的な笑みを浮かべて隼を見る。

「そうやって女の子を口説くんだ」

卷之三

思ひもよらない一スントは隼はおもねす瞳を曇してしまつた

「あ、今、アリと云ふと云ふておがたの」

隼は、どうしたものか、と思つたが、すぐに頭を切り替えてリリーにお願いをする。

「リリー。出会つたばかりなのに申し訳ないんだけど、少しお願いがあります。いいでしょうか？」

「なに？」

「近くの街に連れて行つてほしいのです」

「……」

隼はこの世界の情報収集という意味で街に行きたかいと思つている。

だから頼んだのだが、なぜカリリーは一瞬顔を強張らせた様に見えた。

しかし、それは一瞬のことで、彼女の表情はすぐに元に戻る。隼もそれが一瞬のことだったため、あまり気に留めず、見間違いだろうと自分で勝手に決め付けていた。

「…………いいよ。

……だけど、ハヤトはどうして自分で行けないの？」

リリーから、返答しづらい質問が隼に問い合わせられた。

「…………俺さ、かなりの田舎に暮らしていたんですよ。それで訳あって街に行きたかいのですが、行き方が分からなくて……」

よくもまあ、こんなに言葉を並ばしたな、と隼は自身で呆れていった。

「…………ふうーん。まあ、いつか

リリーは納得こそしていなかつたが、ありがたいことにそれ以上追求してこなかつた。

……そのはずなのだが、リリーは隼の顔を見続けている。

「えつと……なんですか？」「そのね、あつた時から気になつてたんだけどね……その白髪はくぱつって地毛？」

「……白髪？」

「誰のことですか？」

「なに言つてゐるの？ 自分の髪でしょ？」

隼はその言葉の意味が分からなかつた。

それは、隼の髪は黒色である……はずだから。

「リリー、鏡とかありますか？」

「ん、あるよ。はい」

そう言つてリリーはポケットから小さな手鏡を取り出し、隼に渡す。

隼はそれを受け取つて自らの髪を見る。

「 なつ！？」

そこにいたのは白髪の隼だつた。

目や耳にかかるないくらい長さや癖のない髪質は変わつていなかつたが、色は変わつてゐる。

しかし変わつていたのは、それだけではなかつた。

瞳の色も変わつてゐる。

翡翠色に。

隼はそのまま他の身体の部位も見た。

しかし幸いと詰つべきなのか、変わつていたのは髪と瞳だけだつた。

一七 センチメートルを越えた程の身長に少し細めな体型、良くなもなくもない顔の作り、と他はいつもどおりの隼であつた。

ただし顔は髪と瞳の色のせいで、今までとは異なつた印象を受け  
る。

自分で思つのも如何なものかとおもつが、隼は黒髪と黒目の時よりほんの僅かだが、顔つきが良い様に思つた。

リリーが隼と出合つた直後に「白」がビービーと叫んでいたのは、隼のことだったと言つわけだ。

(転移の影響か?)

隼は一つの可能性を考えたが、しかしそれは答えが分からないとあるまぬけな神のせいで。

だから隼は理由や原因を求めるのではなく、事実を、結果のみを受け入れることにしようとした。たった今思つた。

リリーに、また嘘をついてしまつ。

「そうです。これは地毛です……」

「そつか。じゃあ、よつぱんじ良こ暮らしができていたんだね」「リリーからはよく分からぬ返しがきた。

「? ?

どうしてですか?」

「だつて『白』髪だよ!?

『白』なんだよ!?

リリーが怒つた様に声を張り上げた。

しかし隼には、リリーがビービーしたくなにも「白」を強調しているのが分からぬ。

そもそも本当は今日、白髪になつたばかりなのだから分かるはずがない。

「リリー。別に『白』だから別段、変わる」とはないですよ

また嘘…いや、今回は適当なことを言つた。

「嘘つ!?

「うせ私の髪も馬鹿にしてたんでしょう!?

また髪だった。

リリーはなぜか髪に対して異常に反応する。

その時、彼女の目からは涙が流れていた。

理由は分からぬ。何を言つてあげればいいのかも分からぬ。  
だけど彼女の必死さは隼に伝わる。

「俺にはリリーが何にそんな必死なのが分かりません」

「…えつ！？」

「だから教えて下せー」

沈黙が流れる。

そして

「じゃあさ、少し違うけどいい？」

何を、とは聞かない。

言つたのは一言。

いいですよ、と。

「わ、私の髪を触つて、か、感想を言つて」

リリーは今泣いるせいもあるのか、真っ赤な顔で、一度田の上田  
遣い　今日はやううと思つてやつたのではないだろうが　で言  
つた。

隼はリリーの田の前に近寄り、正面から彼女の長い髪に手を通そ  
うとする。

「…っ！」

リリーはその瞬間、ビクリとし、目を強く閉じた。  
そして隼は無言で彼女の、リリーの髪に手を通す。

リリーの髪質は細くて柔らかく、スラリと手から流れた。

「綺麗」

隼は無駄な言葉の一切を省き、本当に伝えないとだけを言った。  
けれどリリーはその言葉を疑つてしまつ。

「嘘つ！？」

「いいえ、綺麗です」

「灰色なんだよつーーー？」

「綺麗な色です」

「……」

「……」

「……認めってくれるの？」

「ええ、綺麗です」

「…本当に？」

「本当にです」

「本当に本当に？」

「本当に本当にです」

「……」

「……」

そして、リリーが急に会場の方へ走りだす。

だが、隼は追わない。

なぜならリリーの顔には涙とともに笑顔があつたから。

そして、さらに十分後。

リリーが戻ってきた。

彼女の目は少し赤くなっているようだが、隼はそのことについて何も言わない。

「「」めんね……」

「気にしなくていいですよ」

「ん、じゃあ早速街に送つてあげるよ」

戻ってきたリリーは元気になつており、見ていて清々しく思える。

「それはありがたいのですが、どうやつて?」

「そんなの決まつてこるでしょ」

魔具をつかうんだよ。

## 01 異世界（後書き）

年末に正月、といそがしいですね。  
……ですよね？

と書いたところで次話の投稿は1月中旬頃を予定しています。

最後に一言。  
感想・評価よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7349z/>

---

神の選択と抗う絆

2011年12月25日18時52分発行